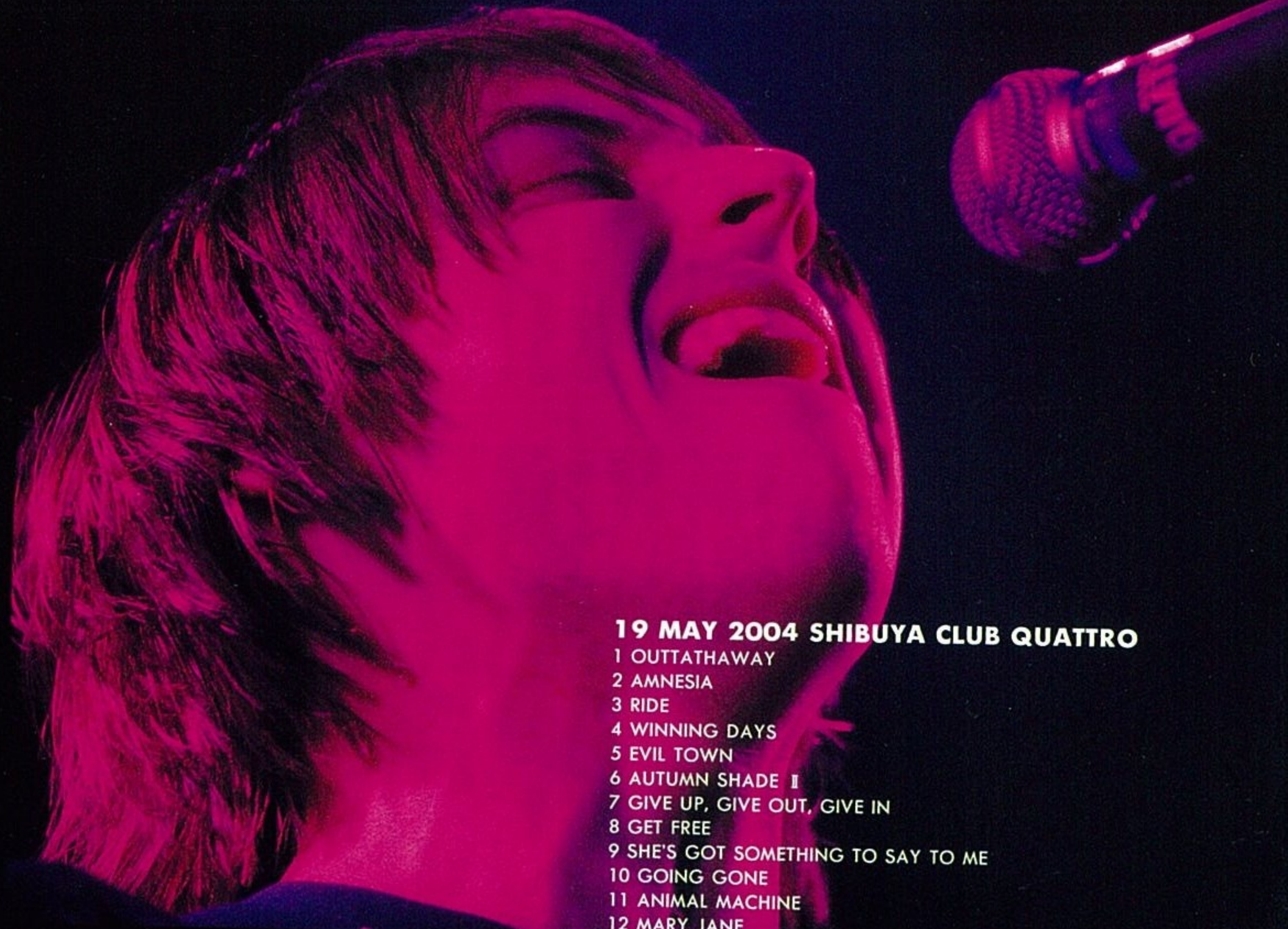


**19 MAY 2004 SHIBUYA CLUB QUATTRO**

1 OUTTATHAWAY
2 AMNESIA
3 RIDE
4 WINNING DAYS
5 EVIL TOWN
6 AUTUMN SHADE Ⅱ
7 GIVE UP, GIVE OUT, GIVE IN
8 GET FREE
9 SHE'S GOT SOMETHING TO SAY TO ME
10 GOING GONE
11 ANIMAL MACHINE
12 MARY JANE
13 AIN'T NO ROOM
14 TV PRO
15 FUCK THE WORLD

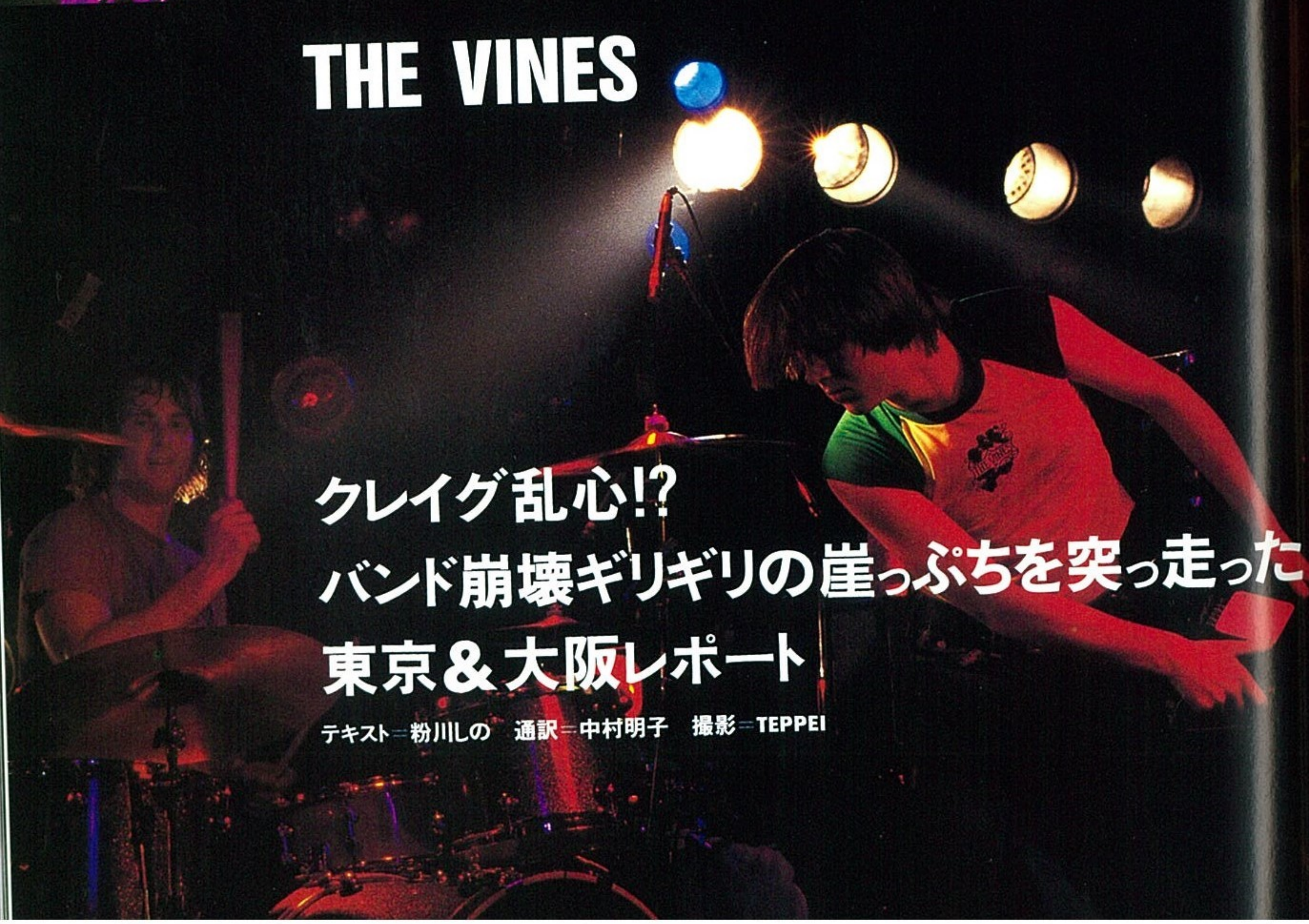
**21 MAY 2004 SHINSAIBASHI CLUB QUATTRO**

1 OUTTATHAWAY
2 AMNESIA
3 RIDE
4 WINNING DAYS
5 EVIL TOWN
6 AUTUMN SHADE Ⅱ
7 SHE'S GOT SOMETHING TO SAY TO ME
8 GOING GONE
9 ANIMAL MACHINE
10 MARY JANE
11 AIN'T NO ROOM
12 TV PRO
**<ENCORE>**
13 SUNCHILD
14 GET FREE
15 FUCK THE WORLD





# THE VINES



## クレイグ乱心!?
## バンド崩壊ギリギリの崖っぷちを突っ走った
## 東京＆大阪レポート

テキスト＝粉川しの　通訳＝中村明子　撮影＝TEPPEI





ザ・ヴァインズ初来日公演、

ないだろうと思ったんだろうけど、しっかり伝わっちゃったよね」

**パトリック（以下P）**「全然ダメだったと思う。自分がステージを降りちゃったこともそうだし、それに……だって、ねえ……僕らの方こそ君がどう思ったか訊きたいんだけど。僕がステージを降りちゃったことにしても……あの場にいた人達はどう思ったんだろうって。今回の日本ツアーが、かなりキツい状態にあることは確かだからね」

●パトリックがステージを降りたのは、アコースティック・セットに移る演出とも受取れるように思えたんだけど、やっぱり違ったんだ？

**H**「いや、アコースティックに移ったのは、あの状況を何とかしなきゃいけないっていう苦肉の策で……パトリックとライアンがステージを降りた後に残ったのは、クレイグとアコースティック・ギターだけだったっていう（苦笑）。あの曲は元はセットリストにも入ってなかったんだ。でも当初やる予定だった曲はあの状態じゃ無理だったからね」

●でも、あそこで投げ出しちゃうまではいかなかったんですよね？

**P**「実は前にもステージを降りたくなったことはあるんだけど、でもやっぱり責任っていうか……あると思うし。でも、この間みたいに衝動を抑えきれなくなると……でもそれにしても、ステージを降りるっていう行為は、みっともないよね」

**H**「実はクレイグがアコースティックやってる隙に『最後までやろうよ』ってパトリックを呼びに行ったんだよね」

**P**「でもいずれにせよ戻るつもりでいたんだ。ステージ脇にあったテーブル蹴って怒りを発散させて。ライアンが先にステージを降りた時、これは絶好のチャンスだと思ったんだよ。何百年もこの機会を待ち望んでいたから（苦笑）。でも結局逃げられない、どこにも行けないんだ。だからヘイミッシュが呼びに来る頃には、もうステージ脇に待機していたんだよ」

**H**「まあドラマっぽいというか、これからも折に触れて言われ続けるんだろうね」

**P**「でも、これだけは言っておくけど、こういう主旨のインタヴューは今後一切やらないと思う。やりたくないとかっていうよりも、意味ないと思うんだよね。もっと別の、バンドとして違う展開が見えてきたらまた話は別かもしれないけど、でもこういうのはもういいよ」

●ええ、わかりました。ちなみに私は『ハイリー・イヴォルヴド』ツアーの時にLAとレディング・フェスであなた達のショウを観てるんだけど、正直言って、演奏自体は今回の方が断然よかったと思うんですね。バンドのアンサンブルもよかったし、クレイグもそれに応えてたし。だからバンドの状態としては決して悪いものではないと思うんですが、それはあなた達自身も自覚していますか？

**H**「それはむしろ君の方がよくわかるんじゃないかな。だいぶ前と今とを比較したら、やっぱり成長しているだろうしね。僕ら自身はずっとやってるわけだから。ただ当時と較べて一つ大きく違うのは、ライアンがエレクトリック・ギターを弾くようになったことじゃないかな。当時ライアンはセットの半分くらいはアコースティックで、残りの曲はまったく弾いてなかったから。それはバンドの音の変化の大きな要因だと思うし、それに、今回のアルバムはやっぱりバンドとして作ったっていうのもある。前作はまったく参加してないし。レコーディングのためにリハーサルもたくさんやったし、そういういろんなことの結果としてバンドの音楽的成長があるんだと思う。それに僕がこのバンドに参加してから、シドニーの小さなパブで4回ギグをやった後、バンドに入って一ヶ月経つか経たないかでLAとイギリスでのショウがあって。つまりこのバンドに入って10回くらいライヴをこなした時点で、すでに三か国にまたがってたっていう。で、他のバンドみたいに、何年も一緒にやってライヴの経験を重ねていってということもなく、バンドとしてはまだ胎児くらいの成長段階でインターナショナルな舞台に立ってしまったという。だからスタート地点としては、むしろ今が絶好の時期なんだよ（笑）」

●じゃあ、『ウィニング・デイズ』のツアーが始まった時、バンドとしての手ごたえがなかったわけじゃないっていうこと？

**H**「手ごたえはあった。このアルバムを作る前もオーストラリアでツアーをやってて、その時にパトリックがリハーサルをやった方がいいって言い出して。それまでは、このバンドはほとんどリハーサルなんてやったことなかったわけだけど、でもその意見にクレイグもすごい乗ってきたんだよ。僕はこのバンドにいるうちはそんなことは一生有り得ないんじゃないかと思ってたから、すごく嬉しかったし。まあほとんどのバンドが当たり前のようにやってることではあるけれど（笑）」

●だとしたら、クレイグはどうなんだろう？ 昨日のライヴのすごく混乱した状態っていうのは、ある意味、クレイグ個人の問題が表面化してしまったということ？

**H**「いや、特別そういうことでもないと思うよ。まず第一に、クレイグは完全に狂ってるから（笑）。医者に診てもらったら、絶対に監禁されるだろうね。ていうか、大の飛行機嫌いだし、長いこと地元にも帰ってないし、そういうすべてが今の状態を招いたっていうことだと思う。だいたい、日本を散々こき下ろしたっていうのも、基本的にどの国に行っても言ってることなんだよ。マイクの前でこそ言わないけどね。ニューヨークでも『ここは最悪だ、クソだ』、イギリスに行っても『クソだ』っていう、ずっとそういう調子だから。で、おそらく東京では、誰もわからないと思って、マイクの前で言っちゃっただけで。まあ、それがあの場にいた人全員に嫌な思いをさせてしまったということなんだけど。でもあいつにロジックは通用しない。理屈じゃないんだよ」

●そうは言っても……あれは、クレイグの本心だと思う？

**H**「うーん……それは僕にはわからないけど。とにかく一人にして放っておくのが一番なんだろうね。たぶん、アシッドでバッド・トリップしちゃってる感じと似てて、そういう時って空港とか雑踏とか、人がいっぱいいる場所は最悪だからさ。きっと誰もいない森とか、あいつにはそういうところが一番合ってるんだよ」

●うん、彼は基本的にそういう人なんだとは思うんですが、さっきも言ったけれども、今回のアルバムは4人全員で作った、よりバンド感の増したアルバムだし、だからこそ問題児を一人抱えたヴァインズというバンドが今後どうサヴァイヴしていくかっていうところに、すごく興味があるんです。あなた達の中で、どう折り合いをつけていくことなのか、もうしょうがないと割り切っていくのか、もしくは4人で話し合って、新しいバンドのあり方、ライヴの見せ方を模索していくのか。

**H**「まず第一にクレイグの場合、話し合いはまったく意味がないよね。きっと話し合ったことと反対の行動に出るに決まってる。だから今の時点では今後どうするかなんてわからないし、正直言って今はとにかく休暇が待ち遠しい。でもクレイグは、音楽の方向性に関しては非常に

今回の来日公演に足を運んだ人はもちろんのこと、公演直後のニュース等で噂になっているのでご存知の人も多いと思うが、ヴァインズ待望の初来日はまさに「大荒れ」という形容がピッタリくる、とんでもないシロモノだった。そしてその予兆は、彼らが来日する前からあったのだ。デビュー・アルバム『ハイリー・イヴォルヴド』ツアーの後半辺りから露わになり始めた、バンド内の不協和音。長期ツアーの疲弊や英米メディアとの衝突。「クレイグ独裁」から「バンド民主主義」に移行した新作『ウィニング・デイズ』は「ロックンロール・リヴァイヴァル」期から脱却したヴァインズの底力を証明しつつも、結果的に『ハイリー・イヴォルヴド』の大成功から来る重圧を完全にはね退けられたとは言い難い作品だった。それに、4月のJET&リヴィング・エンドとの「オージー・インヴェンジョン」ツアーをNYで観た弊誌コレポン中村明美の「ヴァインズ、ヤバいかも」レポート(RO6月号)も不安材料ではあった。

今回の来日にあたって、ロッキング・オンはクレイグ・ニコルズの2万字インタヴューをオファーしていたのだが、直前になってキャンセル。それどころか、来日中にブッキングしていた全取材がブッ飛んだという。クレイグが不安定で、フラジャイルな心臓の持ち主だってことは重々承知してたつもりだけれど、こちらの想像以上に彼は今、混乱した状況に直面していたのかもしれない。そしてそんな不穏な空気が流れる中、ヴァインズ初来日初公演、渋谷クラブクアトロのステージが幕を開けた。

〈5月19日、東京〉

満員御礼のクアトロ、1曲目はいきなりの"アウタザウェイ"だ。ステージ前方は既に横に縦に押し合いへし合いの鉄火場と化している。しかし、ステージ上の4人はどうもぎこちない。マイクの音量、それにイヤホンが不調子なのか、何度も何度もイヤホンやらギターのストラップやらを弄くりながら、苛々した様子を隠さないクレイグ。それは2曲目"アムニージア"が始まっても同様で、この柔らかく有機的なサイケデリック・ナンバーの最中に「ドラッグが欲しい! ドラッグが欲しいんだ!」と叫ぶ彼に肝を潰される。状況が飲み込めていない客席からはどっと笑い声が起こるが、「マジだって!」とイライラ足踏みしながら怒鳴り返すクレイグ。続く"ライド"も本来のアンセミックな動力が生まれないままドシャメシャと崩れ落ちていく。一方のクレイグの声は、想像以上に良く出ている。思いっきり艶っぽいし("ウィニング・デイズ"なんかかなり良かった)、バンドのプレイ自体もヴァインズのライヴの平均値を考えたら、けっして悪い出来じゃなかったと言える。『ウィニング・デイズ』を経て生まれた彼らのバンド・アンサンブルへの意識の変化がきっちり、刻まれていた演奏だった。しかし何て言うんだろう、ステージ上を支配する空気が今日は滅茶苦茶にニヒルなのだ。もっと言うならそれは自暴自棄の香りであり、行き場がないまま放り投げられた「悪意」そのものだ。

「この国は最低最悪だ!」

何をトチ狂ったか、そう何度も何度も怒鳴っているクレイグに、フロアにも戸惑いや殺伐を含んだ空気が流れ始める……ヤバイ。最初にキレたのはライアン(G)だ。バンド内で最もクレイグと親密な関係を築いているはずの彼の退場には、今日のパフォーマンスがやっぱり「特別」に辛いものなんだってことを改めて思い知らされる。そんなライアンに続いてパトリック(B)もベースを投げ捨ててステージを去っていく。結果的にクレイグのアコギ&ヘイミッシュのドラムスだけになったアコギ・セットでの"オータム・シェイドII"が聴けて、しかもそれが良かったのは皮肉な話。ヘイミッシュが幕袖に向かって退場した2人に必死で「戻って来い!」とジェスチャーしているのが見える。何とか4人揃ったところで始まったのは――えっ、"ゲット・フリー"!? 事前に貰ったセットリストではアンコール1曲目だったはずのナンバーだ。「ひょっとして強制終了か!?」と観念したが、実際出だしを放棄したクレイグの代わりにオーディエンスが歌い繋いでいなかったら、ここで終っても全然おかしくなかったと思う。

その後も「首カット」のジェスチャーを延々繰り返し、ヘイミッシュに八つ当たりするクレイグ。ギターのチューニングが狂ったままでボワボワした不協和音を撒き散らかす"メアリー・ジェーン"は、ある意味恐ろしくサイケだ。そこからラストの"ファック・ザ・ワールド"にいたる最終コーナーは、クレイグのヤケクソとその他3人のギリギリの忍耐力が相まって、加速度的にテンションが上がっていって、カッコイイと思えないこともない。そして最初に堪忍袋の緒が切れたのはパトリックだ。ベースを手にダランとぶら下げて演奏放棄、ステージ端でクレイグを睨み付けている。ラストはギターネックでハイハットをブチ叩きつつ、「ピースサイン」を残して客席に一瞥もくれずにクレイグも退場。最初に感じたのは「やっと終った」という安堵の気持ちだった。もうこれ以上、演奏の「外側」で混乱し続けるクレイグの姿、そんな彼に痛めつけられるメンバーの姿は、観たくなかった。

「ヴァインズのライヴって元々こういうものだろ?」という見方もある。実際、破綻スレスレの際でエナジーを暴発させていくカタルシスこそがヴァインズのステージの醍醐味でもある。しかし、この日の彼らには一切「光」がなかった。崩れ落ちそうなパフォーマンスの外観とは裏腹に、本能的なポジティヴィティ、飼いならされない生命力の強さを感じさせてくれたかつての彼らの姿は、見る影もなくなっていたのだ。

夜、レコード会社の担当女史に電話し、大阪公演も観たいとお願いをした。このままではあまりに後味が悪すぎるし、何と言っても、記念すべき初来日公演なのである。もう一度チャンスが欲しい。同時にパトリックとヘイミッシュにも、大阪で話を訊かせてもらうことにした。

〈5月21日、大阪〉

昼。彼らが泊まっているホテルの一室で、パトリック&ヘイミッシュと挨拶を交わす。バンドの「お日様」としてフランクな雰囲気を絶やさないヘイミッシュはともかくとして、一方のパトリックはやつれ果てた様相だ。透き通った瞳の奥に暗い影が見え隠れして、痛々しいことこの上ない。医者になる道を諦めてヴァインズに賭けたパトリック。そんな彼が今、後悔していないことを祈らずにはいられなかった。でも、今日は訊かなきゃいけないことが沢山あるのだ。

●東京のライヴを観させてもらったんですが、正直言ってかなりショッキングなステージでした。だから、どうしても大阪公演を観ておきたかったし、あなた達に話も訊かせて欲しいと思ったんで、今日はここに来ました。

**ヘイミッシュ(以下H)**「今日は東京のショウよりもいいものになるといいんだけどね」

●まず、東京のライヴを終えての率直な感想を訊きたいんだけれども。

**H**「みっともないところを見せちゃったと思ってる。音楽的には過去最悪ってわけではなかったと思うんだけど、クレイグが結構ひどいこと言ってたから。自分が何言ってるか誰もわから

明確なヴィジョンを持っているっていう、それだけは確かだよ」

P「きっと外から見れば、『成功したバンドのメンバーとして、この人はバンドの評判とか名声とか、そういうことを気にしているに違いない』ということなんだろうけど、そういうものはだんだんどうでもよくなるっていうか。もしこれがまだ結成したての頃だったら、そういうことが気になってたかもしれないけど……僕らには、音楽的な面で自分の全力を尽くすっていうことしかないんだよ。でも、こういう場で、ある状況に対して、自分がいかに無関係か、いかに自分達にはどうすることもできないかを力説しなければならないなんて、本当に恥ずかしいことだと思う。でも君らが見ているのは、いわば物事の末期の状態というかね」

●で、その音楽的な面で全力を尽くす最初の舞台が、今日の大阪のショウなんですが。今日こそヴァインズ本来の、いい意味で狂ったステージが見れるといいなって思ってるんだけど、自信はある？

H「何が起こるかは僕にもわからない。でも、いい意味で狂ったバンドは求めるけど、度を越すなって……それもわりと勝手な話だよね」

P「はっきり言って自信ない」

●……。

H「本当にどうなるかわからないんだよ（苦笑）。いや、もちろんいいライヴにしたいって気持ちはあるし、僕もパトリックも精一杯プレイするつもりでいる。でもさ、言えることはそれだけなんだ」

●まあ、それがある意味でヴァインズってバンドのスリルだったりするのかもしれないけど。今後もそういうジェットコースターみたいなツアーを続けていく覚悟というか……決意というか、そういうものはある？

H「……ハハハ。今度のツアーは8月末くらいまで日程が出てるけど、今はとにかく家に帰って休みたいんだ。別にバンドを辞めるっていうことではなくて、バンドとしての低迷期というか。前にも一度こういう状態になったことがあって、アメリカ・ツアー中にステージ上で大げんかしたことがあったけど、でもまさにあの時みたいな感じだよ」

●フジ・ロックは出演決まったんですよね？

H「うん。実はフジはかなり楽しみにしてるんだよね。いろんなバンドからとにかくいいって聞いてるから」

●うん、フジ・ロックには本当にマジックがあるから。仮にその時までバンドの混乱が続いていたとしても、絶対来た方がいいですよ。

H「だから来たいってば（笑）。他のバンドも観るのも楽しいし、フェスティヴァルの雰囲気が好きなんだ。オーストラリアでビッグ・デイ・アウトに参加した時も最高に楽しかったしね。往年のヒーローだったデイヴ・グロールにも会えたし、想像していた通りものすごくいい人で感動した。だからフジでもまたそういうフェスティヴァルの素晴らしい経験ができればって思ってるよ」

　結局、インタヴューでは今日のステージが「大丈夫」だという確信は最後まで得ることができなかった。それに代わって痛感させられたのは、「どうすることもできない」という2人の徹底的な無力感だった。重苦しい気持ちと共に心斎橋クラブクアトロへと向かった。

　が、しかし。結論から言うならば、この大阪公演は坂を転がり落ちていたヴァインズというバンドが、行き止まりで砕け散るギリギリの瀬戸際で急ブレーキをかけ、何とか崩壊を免れた奇跡的な一夜だったと思う。

「エコーが全然足りてないよ！」
「リバーブをもっとくれよ！」

　2曲目〝アムニージア〟の最中にクレイグがこの日初めて放った言葉は、初日東京の捨て鉢な「ドラッグ！　ドラッグ！」と余りに対照的な、「建設的」な苦言だった。自分のギターの音色にも、ドラムスにも、ベースにも、それどころか自分を取り囲む全ての物に不満気で、当り散らしている様は相変わらずなのだが、それでもこの日の彼は、最後まで諦めなかったし、状況を無理やりにでも打破しようとしていた。結局東京では一度も見れなかったへなちょこハイ・ジャンプも〝ライド〟で早くも飛び出した！　無様なのに目が離せない。そんなヴァインズのマジックが、ようやく現実のものになってきた。

　その一方で、暴れ系ナンバーとメロウな歌物ナンバーが規則正しく交互に繰り出されるセットリストが、いささか単調なのは否めない。もっとごちゃ混ぜにして反応を試してみても良かったと思うが、流石に余裕が無さ過ぎたんだろうな、やっぱり。しかし、2本のギターがきつく絡まりあって屈強なグルーヴを生み出していった〝シーズ・ガット・サムシング・トゥ・セイ・トゥ・ミー〟（クレイグ、ハイハットを飛び蹴り！）や、ジャリジャリ耳障りなノイズがフロアを襲った〝ゴーイング・ゴーン〟は、暴れ馬ヴァインズの本領発揮なポジティヴなパワーを感じさせてくれた。

　そして、今夜のムードを決定付けた曲が〝メアリー・ジェーン〟だった。断片的なノイズ・コラージュが徐々に像を成し、柔らかな美観がゆっくり立ち上がっていく出だしは丁寧でいい感じだったのだが、運の悪すぎることに途中でまたもやギターが調子不良（泣）！　音がブツブツ途切れ始め、クレイグが幕袖に向かって必死にギター・チェンジを乞うているが、絶対間に合わない――ああ、今度こそダメだ――と諦めて目を瞑ると、全ての音が一瞬途切れた隙間から、恐ろしく澄み切った歌声が零れ落ちて、思わず鳥肌が立った。そう、クレイグは諦めなかった。最後の最後で踏ん張って歌い繋ぎ、バンドを「守って」みせた。そんな〝メアリー・ジェーン〟の危機を乗り切ったヴァインズには、もはや恐いものは何もなかったんだろう。〝エイント・ノー・ルーム〟も〝TVプロ〟も会心の出来だ。笑顔すら零れている。がむしゃらにジャンプを繰り返すクレイグを、パトリックが「信じられない」という表情で見つめている。

　アンコール、〝サン・チャイルド〟が終ったところで「クレイグ、アー・ユー・OK!?」と客席から声援が飛ぶ。ニンマリ笑うクレイグ。多分、彼は全然「OK」じゃなかったはずだ。この日も、そしてもちろんこれからも。一度だって大丈夫だったことのない稀代の「FUCKED UP BOY」、それがクレイグ・ニコルズなのだから。しかしそんな彼の混乱した自我が、危うい「FUCK!」の想念が、名も無き他者ではなく音楽そのものに向けられたとき、ヴァインズは空高く飛翔することができる――ラストの〝ゲット・フリー〟と〝ファック・ザ・ワールド〟が証明したのは、そんな彼らの支離滅裂な「希望」だった。

　この日本公演の直後のシドニー公演をドタキャンしたヴァインズは、インキュバスとのUSツアーも「休養が必要」という理由でキャンセル。そして、フジ・ロックにも来ないことが正式に決まった。今、いきなり解散のニュースが飛び込んできたとしても何らおかしく無い崖っぷちにヴァインズは立っている。しかしひとつだけ確かなのは、危機を逆転させるチャンスはいまだそこら中に転がってるってこと。今回の来日で彼らが証明したのは、ヴァインズが抱える危うさを秘めた、爆発の「奇跡」だったのだから。

# 取材ノートから



## マイ・バンド

LA：グリーン・デイ取材（5月25日）

以前来日した時には、神戸牛と聞いてバクバク食べていたという自称〝ベジタリアン〟のグリーン・デイ。しかし、今回取材の合間に食べていたのは、サラダ。おかげでか、さらに痩せたビリーは若返っていて、体調もバッチリという感じ。思っていたよりシャイだったのには驚いたけど、インタヴューでは熱弁だった。

その代わり、いつもしゃべりまくるというトレがなぜか静か。インタヴュー中も「ビリーは痩せるために胃を切ったんだぜ!!」という、調子が心配になる冗談しか飛んでこなかった。

マイクは、マイ・ペースな天然君。他のふたりといつもタイミングがずれていて、前日も私達がスタジオでリスニングだったので、スタジオが使えなかったのに、ひとりだけいつも通り到着。待ちぼうけを食らう羽目に。

その行動パターンも性格も三人三様で、バンドのバランスって絶妙だなと思っていたのだけど、ランチ・ブレイクの時にテレビでテロへの警戒が再び強くなっていると報道されると、三人とも同時に同じくらいの声でアメリカ政府にブーブー文句。それも、さすがバンドだなと思った。（中村明美）



## 老けません

英国ガトウィック空港：ザ・キュアー取材（5月18日）

同年代で今年同じく大復活のモリッシーがロマンスグレーの趣を見せ始めているのに比べて、なんだかいつ会っても印象が変わらないロバスミ。化粧と体型が絶対的なせいかな。レディへみたいに親にならないからかな。「権威的でもないし好き放題やってるし変てこりんな家に住んでて時々何ヶ月もいなくなっちゃうし格好も変だし、親戚筋の子供達には年齢不詳の変な種族と思われてる」そうな。精神的にもどこかピュアな子供性が残っていて、ロス・ロビンソンへの入れ込み方も幼稚園で新しい友達が出来た子みたいだ。ロバート語録のひとつに「関わったものはとことん深く知りたい。だからメアリーのことも、もっともっとよく知りたいんだ」というのがあって、そのとき25年も一緒にいてまだ言うか、すごい、と思ったものだが、彼のこの「蜘蛛の糸の愛」に引っかかったら天下の体育会系ロス・ロビも今後なかなか手放してもらえないかもしれません。

そんなロバートから伝言。なかなか来日しなくて前回も嘘ついてごめんなさい、今回は本当に行けそうだから、と。……賭ける？（山下えりか）



## スウェーデンの英国紳士

ストックホルム：ザ・ハイヴス取材（5月28日）

前回は電話取材だったので、直対面は実はこれが初めて。数日前ロンドンの事務所で聴いた新作の、聴く音すべてを薙ぎ倒す高圧ロックンローラーぶりに完全にヤられた直後でもあり、素顔の彼らは一体どんな連中なんだろう？と興味津々で飛んだストックホルム。結論から言うと、想像してた以上にあらゆる面で相手に対するサーヴィス精神が旺盛で、ウィットに富み（英語力もなかなかのもの）、とても他人とは思えぬほど英国人的なユーモア感覚（慣れるまでは意地悪か皮肉にしか聞こえないが、一旦波長が合えば悶死するほど笑えるタイプのギャグ）がごく自然に身に付いた、摩訶不思議なスウェーデン人の兄弟ペレ&ニックだった。取材中、煽る為に相当辛口のジョークを連発しようが、最後まで冷静かつ笑顔で応戦してくる様には内心さすがに脱帽。しかも当日写真撮影があるわけでもないのに、全員があの黒蝶タイ&白スーツ姿でビシッと登場し、取材後はその格好のまま真昼のように明るい白夜の街中を歩いて帰ったザ・ハイヴス。その後姿を見送りながら、偉い！と唸ってしまった。（児島由紀子）



## どうしようもない

大阪：ザ・ヴァインズ取材（5月21日）

この仕事に就いて以来、それこそ何百という数の取材をさせてもらっているが、もちろん毎回ナイスなインタヴューが取れるわけがなくて、時には話が嚙み合わなくて玉砕したり、相手を怒らせて泣きそうになったりと大コケも何度も経験している。でも、今回ほど相手も自分も互いに「困った」インタヴューは今までなかったかもしれない。なにせ事の当事者がエスケープしてるのに、彼の暴挙の後始末をパトリックとヘイミッシュがやらなきゃいけない理由はどこにもないわけで、しかしこっちとしてはその暴挙の真意を何とかして知りたいし……という堂々巡り。ポッカリ空いた「穴」を彼らと一緒に恐々覗き込んでるような、そんな奇妙な気分になった取材だった。

ちなみに私はクレイグ本人には一度しか話を訊いたことがない。『ハイリー・イヴォルヴド』がリリースされる前、LAで会った彼はまるで「無邪気」が服を着て歩いているような人だった。「僕って頭がヘンだからさ〜」と笑いながら、マックのダブル・チーズ・バーガーにかぶりついてたのを覚えてる。未来が「ちょっと怖い」と言っていたのも、覚えている。（粉川しの）